

- 1 派遣期日 平成23年8月9日(火)
- 2 研修先 会場名 ゆめおおおかオフィスタワー(ウィリング横浜:神奈川LD協会)
所在地 横浜市港南区上大岡西1丁目6-1

- 3 研修内容: 講義名: 神奈川LD協会 夏のセミナー2011
講師: 海津 亜希子先生(国立特別支援教育総合研究所 主任研究員)

研修テーマ	読みにつまずきのある小学校低学年の児童を対象にした具体的な指導 ～通常の学級における多層指導モデルMIMを利用して～
-------	---

①MIM(ミム)とは

MIM(ミム)とは、multilayer instruction model(多層指導モデル)の略で、通常の学級において、異なる学力層の子どものニーズに対応した指導・支援をしていこうとするモデルである。特に、子どもが学習につまずく前に、また、つまずきが深刻化する前に指導・支援を提供していくことをめざし、一人一人を丁寧にみていくアセスメントを指導へつなげていくものである。MIMの中に登場するアセスメントや指導法は、国立特別支援教育総合研究所主任研究員海津亜希子先生の研究グループが、8000を超える全国の現場の教師や子どもたちの協力で完成したものである。

②MIM「読みのアセスメント」でめざすこと

子どもたちの読みの流暢性を育むことがねらいであり、文字や語を正確に素早く読むこと(流暢性)が、ひいては読解力へとつながっていくという考えである。小学校だけでなく、民間のLD指導機関でも治療プログラムとして活用されている。福岡県飯塚市では、全22校の小学校一年生に数年前から導入され、全校をあげて取り組み実績を上げていて興味深い。

③MIMの構造

3つのステージから成っている。

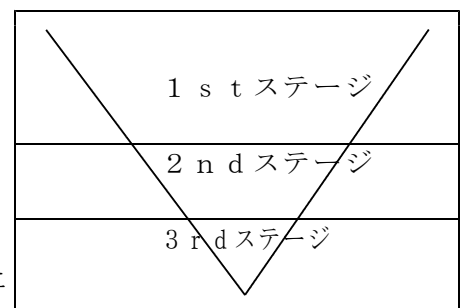
- ・1stステージ: 通常の学級で授業の中で活用できる。

- ①視覚化や動作化を通じた音節構造のルール理解
(促音・長音・拗音・拗長音)
- ②(逐字でなく)かたまりとして語を捉えることによる読みの速度の向上(ことば絵カード等)
- ③日常的に用いる語彙の拡大と使用(ちょっとかわったよみかたのかきとりしゅう・はやくちことばしゅう)

- ・2ndステージ: 1stステージの補足的な指導をめざしたもの。

(ことばあつめ・もしもさくぶん)

- ・3rdステージ: のびが乏しい子どもを対象にした補足的、集中的、柔軟な形態による特化した指導(トントンゲーム・特殊音節のルール確認・絵に合うことばさがし・ことばあつめプリント・もしもさくぶん・感想発表)



④なぜ、特殊音節なのか

特殊音節は、他の仮名文字のように、文字と音とが一对一に対応しないために、頭の中での音の操作が困難な子どもにとって習得が難しく、欧米での読み書き障害の主要原因とされている。通常の学級に4.5%の割合で在籍するとされるLD(学習障害)の子どもは、特殊音節の習得に低学年からつまずきを示し、徹底的なルール確認等の指導が行われなければ、高学年になってもその定着は不安定で改善されないという報告がある。読みはすべての学習の基本であり、このように基礎が固まっていない段階では、他の学習までも阻害される恐れがあるため。早期の確実な習得が重要である。

⑤MIMの具体的指導方法の一例

<方法>

- ・第1学年の児童においてMIMの読みのアセスメント・指導パッケージを用いて指導。
- ・子どもたちには「めざせよみめいじん」として紹介し、同形式のテストを定期的の実施していくことで、子どもの習得の進捗状況を個人レポートとして、数値（グラフ等）で捉えていくことができる。
- ・構成はテスト①「絵に合うことばさがし」とテスト②「3つのことばさがし」の2部で構成されている。

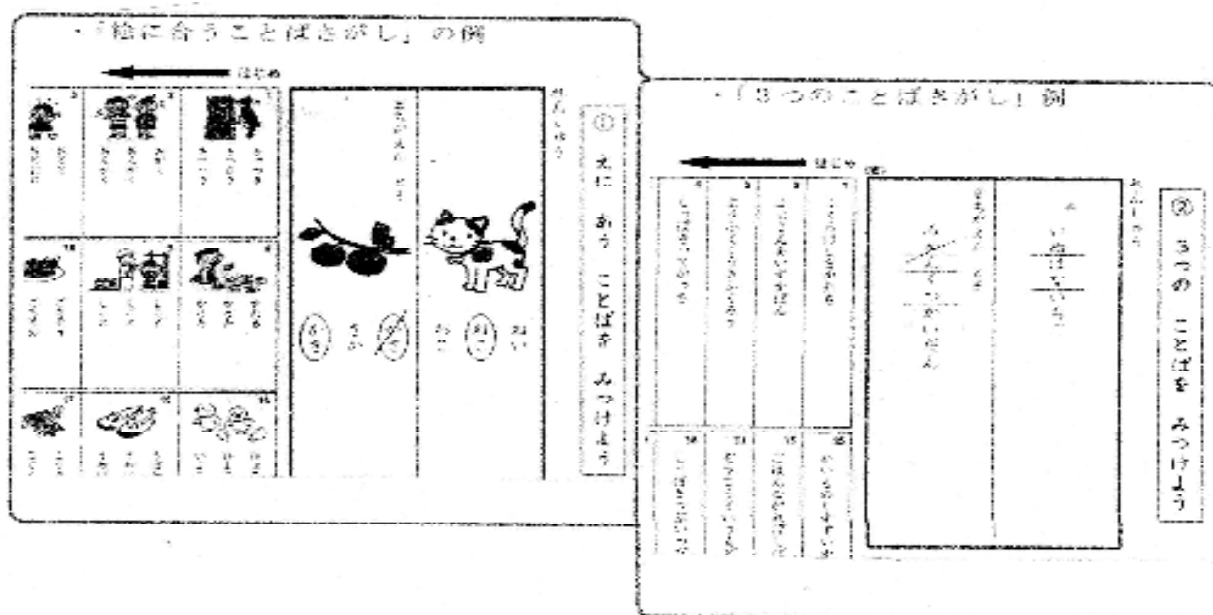
<時期・頻度・時間>

- ・4月から3月までの1年間、隔週金曜日、国語の授業の前半や朝学習の時間に実施。各テスト1分ずつで2つ実施する。教師も児童も慣れるに従って、テスト用紙配布からテスト終了後回収するまで、説明を入れても10分以内で実施可能である。
- ・特殊音節の指導については、1時間ずつ計4回国語の授業を使って実施（1学年の国語の年間指導計画の中にもともと組み込まれているもので、十分に対応できる。2学期以降も復習として指導可能）

<指導者：場所>

- ・各学級担任（教諭各1名）：各学級（1学級の児童数は33～34名）

<教材例>



⑥MIMの効果

- ・どのクラスにおいても、児童は「めざせよみめいじん」を心待ちにし、「クイズゲームみたい」といって取り組む児童が多かった。また、回数を重ねていくうちに「今日は何問目までいった。」「あと少しで終わったのに」と意欲的な参加態度が見られた。
- ・特別な支援を必要としている子どもはもちろん、異なる学力層（特に学習が得意な子ども）においても、平常の授業をしていた群と比べて、明らかな差（読みに関する検査得点の高さ）が見られた。
- ・MIMを実践した群と平常の授業実施群との間で差が見られた内容を見ると、特殊音節の読みに限らず、特殊音節の書き、読書力の総合的な力（読解等を含む）にまで及んだ。

4 感想（本校の教育に生かすために）

上記（MIM）の指導例は、本校でも十分に活用できると考える。8月の登校日に試験的に1年生に実施してみたところ、初回は、どうしても見過ごすことのできない結果であった。実際に特殊音節につまずいている児童のことを考えると、早期に対策を講じる必要があり、2学期以降実践したところ、少なからず読みのつまずきの克服が認められた。学力向上のための一つの方法になればと痛感する。このMIMと出会えたことに感謝し、子どもたちのつまずきを救っていききたい。